

研究資料

中央競技団体における最適なアスリート育成パスウェイ構築に向けた現状把握及び
課題抽出のためのコミュニケーションツール「日本版パスウェイヘルスチェック」の開発
Development of the communication tool “the Japanese Pathway Health Check” for
optimising athlete development pathways in National Federations

萩原正大¹⁾, 衣笠泰介¹⁾
Masahiro Hagiwara¹⁾, Taisuke Kinugasa¹⁾

Abstract : This study reported a development process and a case study of the Japanese Pathway Health Check (J-PHC), which is a communication tool for understanding the current status and for identifying challenges of athlete development pathways in the National Federations (NFs). By advancing the case studies of United Kingdom and Australia, the J-PHC was developed including 93 questions based on the concept of Japanese athlete development pathways. The J-PHC was refined through implementing the national projects based on a sports policy over 7 years. The processes of discussing main challenges and the required next actions among the key stakeholders and forming consensus on their views and interpretations based on the J-PHC results were highlighted in the study. The communication tool developed in the case study is expected to facilitate a common understanding of the key stakeholders leading to align athlete development pathways at the system level in Japan.

Key words : athlete development pathways, visualization, information sharing, co-design, system alignment

キーワード：アスリート育成パスウェイ, 可視化, 共有化, 連携・協働, システム統合

¹⁾日本スポーツ振興センター・国立スポーツ科学センター

¹⁾ Japan Sport Council, Japan Institute of Sports Sciences

E-mail : masahiro.hagiwara@jpnport.go.jp

受付日：2022年6月1日

受理日：2022年8月29日

I. 背景

アスリート育成パスウェイ（パスウェイ）の概念は、子どもがスポーツに触れてからトップアスリートに至るまでの過程を示すもので、いわゆる中央競技団体（NF）で推進されるスポーツの普及とアスリートの発掘・育成・強化に関連しており⁴⁾、世界的にもその概念が浸透してきている²⁾。日本スポーツ振興センター（JSC）では、国のスポーツ政策を踏まえて2012年から現在に至るまで、「メダルポテンシャルアスリート育成システム構築」「アスリートパスウェイの戦略的支援」「次世代ターゲットスポーツの育成支援」等のパスウェイに関連する事業を推進及び支援してきた。

こうした中、文部科学省「第3期スポーツ基本計画」^{註1)} やスポーツ庁「持続可能な国際競技力向上プラン」^{註2)} でも、NFは国内の各競技スポーツを統括する団体として、「国際競技力向上の観点からアスリートの競技開始からトップレベルに至るまでの道筋を整備することが求められ、このパスウェイの構築等を通じた、中長期の戦略的な発掘・育成・強化の取組により、世界で活躍するトップアスリートを継続的に輩出する」ことが謳われている⁵⁾⁷⁾。また衣笠ほか⁴⁾は、「パスウェイに関わる様々な関係機関が連携・協働してシステム開発に取り組むことが、中長期的な視点から国際競技力強化に貢献できる」と述べている。

さらに、パスウェイ構築に関わるNFの育成・強化等の担当者とその関係者（地域のコーチや指導者、保護者、医・科学スタッフ等）が効果的に連携・協働するためには、共通言語（共通理解を促す専門用語）を用いた統一の枠組み（ある定められた視点で物事を整理する共通の枠組み）が必要であることも分かっている⁶⁾。つまり、共通言語や統一の枠組みを用いて、NFのパスウェイ構築に関わる関係者の間でコミュニケーションを図ることで、関係者間の連携・協働が促進され、NFが中長期的な視点に立ったパスウェイ構築につながる可能性がある。

NFがパスウェイ構築を目指す上で、その現状を把握することや課題を抽出することが大切であ

る。イギリスのスポーツ統括団体の一つで、NFに対する公的資金の戦略的な配分を担う機関であるUKスポーツは、NFにおけるパスウェイの現状把握や課題抽出のため、パスウェイヘルスチェック（PHC）というコミュニケーションツールを用いて、主にNFにおける効率的で持続可能な育成プログラムの開発を支援している⁸⁾。具体的には、NFとスポーツ統括団体が競技横断的に4年に一度このツールを用いることで、パスウェイに関連する多角的な視点（ギャップ分析、ジュニア期からシニア期への移行率、育成プログラムの有効性等）から、競技別のパスウェイの課題とその改善策について協議した上でパスウェイの最適化や強化費配分につなげている。また、スポーツオーストラリア（当時オーストラリアスポーツコミッション）は、オーストラリアのスポーツ政策立案や予算配分を担う機関であるが、彼らもパスウェイの概念の一つであるFTEM¹⁾を用いたPHCをNF内での自己点検のツールとして実施し、その回答結果を用いたNF内での議論を経て強化戦略プランに反映させている⁹⁾。したがって、これらの諸外国の事例から、NFがPHCを活用してパスウェイの現状を多角的な視点から可視化及び定量化した結果を用いて、NFのパスウェイ構築に関わる関係者の間で現状や課題について継続的に協議し、その改善策をNFの強化戦略プランの中に反映していくことで、将来的に中長期的なパスウェイ構築につなげられる可能性がある。しかし、我が国ではこのような包括的な視点でNFのパスウェイの現状を可視化し、NFのパスウェイ構築に関わる関係者の間でのコミュニケーションを図るためのツール（コミュニケーションツール）が存在しなかった。

そこで本研究では、NFのパスウェイを構築支援する事業を実践する中で、NFとJSCが協働して開発したコミュニケーションツールである「日本版PHC」の開発過程を報告する。なお、本研究の開発過程の中には、実際の活用事例が含まれており、それらの結果を踏まえて、日本版PHCの活用方法や注意点を検討し、NFがパスウェイ

に関する現状把握や課題抽出のためのコミュニケーションを促進するための知見を得ることを目的とした。

II. 方法

1. 日本版 PHC の開発に参加した関係者

本研究における日本版 PHC の開発に参加した関係者は、JSC のパスウェイに関する専門家（パスウェイ専門家）6 名、パスウェイに関する支援及び研究の経験が豊富な海外有識者（パスウェイ有識者）1 名と、次に示す事業に参加した NF28 団体（オリンピック競技：夏季 18 団体、冬季 5 団体、パラリンピック競技：夏季 5 団体）とした。対象とした事業は、2016 年度「メダルポテンシャルアスリート育成システム構築（文部科学省委託事業）」、2017～2021 年度「アスリートパスウェイの戦略的支援（JSC 事業）」、2021 年度「次世代ターゲットスポーツの育成支援（JSC 事業）」とした。なお、本研究では事業間に重複した団体が存在したため、重複した団体は一つの団体としてカウントした。当事業の各 NF 担当者を中心に普及・発掘・育成・強化に関連する回答者 5 名程度が選出され、1 団体につき 1 つの日本版 PHC の回答を提出することとした。

本研究は JSC 事業の中で、NF のパスウェイの現状把握や課題抽出のためのコミュニケーションツールの開発を試みたもので、当時開発中であった日本版 PHC を NF と JSC の両方で活用した結果を踏まえて、NF はパスウェイの現状把握や課

題抽出を行い、JSC は日本版 PHC の設問、回答、実施方法等を洗練化した。

2. 日本版 PHC の開発過程

これまで JSC は、NF におけるパスウェイの構築状況を可視化する方法がなかった。日本版 PHC の開発趣旨は、NF におけるパスウェイの現状把握や課題抽出のためのコミュニケーションツール開発であった。表 1 に日本版 PHC の開発過程の概要を示した。2016 年の開発開始時には、イギリスやオーストラリアの事例^{8),9)}を参考に、回答者の基礎情報（競技団体名、回答者の役職、回答日等）、NF の基礎情報（組織図、予算状況、競技人口、アスリート／指導者／スタッフの人数、強化拠点等）に加え、JSC で当時開発中であった日本版 FTEM^{3),註3)}の育成段階（F：ファウンデーション、T：タレント、E：エリート、M：マスタリー）と育成の基軸を踏まえて、個人要因（心技体知、インテグリティ）、スポーツ要因（組織のビジョン／リーダーシップ／文化、質の高いコーチング、質の高い育成環境）、システム要因（関係者との連携・協働、ネットワークと支援）の観点から、パスウェイの全段階の設問（30 項目）、普及段階の設問（71 項目）、発掘・育成段階の設問（106 項目）、強化段階の設問（167 項目）、コーチに関する設問（21 項目）に区分し、全 395 項目の設問を抽出した。これらの設問に対する回答は、4 つの選択肢（「いいえ」「どちらかというといいえ」「どちらかというとはい」「はい」）を設

表 1. 日本版パスウェイヘルスチェックの開発過程の概要

年	開発の変遷（バージョン履歴）
2016 年	・ Ver.1.0の開発
2017 年	・ Ver.1.0からVer.1.5への更新 ・ Ver.1.5からVer.2.0への更新
2018 年	・ Ver.2.0の運用
2019 年	・ 運用ツール（概要説明書、実施説明書、採点用テンプレート、フィードバックシート）の開発
2020 年	・ Ver.2.0の運用
2021 年	・ Ver.2.0からVer.2.4への更新

定し、各設問に対して「はい」の回答をすることでNFのパスウェイ構築状況が最適化されているものとした。

抽出した全395項目に対して、イギリスとオーストラリアのPHCの各設問⁸⁾⁹⁾が全126項目と全150項目であることに鑑みて、日本版PHCの内的妥当性の検証を行った。パスウェイ専門家3名とパスウェイ有識者1名で内容が重複する設問の削除や類似する設問の統合等を行い、パスウェイの全体を網羅した日本版PHC Ver.1.0(全87項目)を開発した。

日本版PHC Ver.1.0は、2016～2017年度の事業対象NF6団体に対して試験的に用いた。日本版PHCの回答結果について、対象NFの回答者とパスウェイ専門家との間で議論して、パスウェイの現状把握や課題抽出を実施した。一方で、回答した各NF6団体に設問の重要性(1「全く重要でない」～5「とても重要である」)と簡潔性(1「とても分かりにくい」～5「とても分かりやすい」)に関する事後のアンケート調査を実施し、その調査の結果を踏まえて日本版PHC Ver.1.0における設問の重要性や簡潔性の課題や修正点等を検討した。特に簡潔性の結果が低かった、分かりにくい設問についてパスウェイ専門家、パスウェイ有識者、対象NFの事業担当者の3者と議論しながら5回の修正を繰り返すことで、日本版PHC Ver.1.5まで更新した後、さらに設問の新規追加及び分割により日本版PHC Ver.2.0(全93項目)まで更新した。加えて、日本版PHC Ver.2.0の設問の重要性(1「全く重要でない」～5「とても重要である」)と簡潔性(1「とても分かりにくい」～5「とても分かりやすい」)に関するアンケート調査をパスウェイ有識者1名と対象NFの事業担当者2名に実施した。その結果、重要性の結果が高かった設問については、得点の重み付けが高くなるように設定をした。

日本版PHC Ver.2.0は、2018～2019年度の事業対象NF6団体に対して試験的に運用し、その結果を踏まえて、日本版PHCの運用ツール(概要説明書、実施説明書、採点用テンプレート、

フィードバックシート)を開発した。その後、日本版PHC Ver.2.0は、各種運用ツールを用いて、2020～2021年度の事業対象NF23団体を対象に、各NFのパスウェイの現状把握や課題抽出のために用いた。各NFからの事後アンケートによる調査結果を踏まえて、設問の簡潔性を高める説明の追記や得点の重み付けの度合いの調整等を4回実施し、現時点で最新版である日本版PHC Ver.2.4まで更新した。

3. 日本版PHC Ver. 2. 4 の設問とフィードバック内容

表2に、日本版PHC Ver.2.4の設問一覧表を示した。設問は、先述のとおり日本版FTEM³⁾の段階と育成の基軸により整理された全93項目であった。これらの設問に対する回答は、Ver.1.0と同様に、4つの選択肢(「いいえ」「どちらかというといいえ」「どちらかというとはい」「はい」)を設定した。

図1に、回答結果より作成されたフィードバックシート(イメージ)を示した。回答後のフィードバックは、イギリスのUKスポーツで実施されていた信号の色に見立てた3段階の評価システムを参考にした⁸⁾。回答結果は、日本版FTEM³⁾の段階と育成の基軸別に得点化し、100点満点中75点以上を青色、50点以上75点未満を黄色、50点未満を赤色と信号の評価システムで可視化した。また、各NF内で相対的に得点が低かった(回答者の過半数以上が「いいえ」又は「どちらかというといいえ」と回答した)設問、回答者間で回答に差があった(ある回答者が「いいえ」、ある回答者が「はい」と回答した)設問を抽出してフィードバック内容に含めた。これらのフィードバック内容を用いて、パスウェイの現状把握や課題抽出をNFにおける日本版PHC回答者の間で(原則、パスウェイ専門家によるファシリテーションを含めて)議論する課題検討会議の機会を設けた。そして、NFとして回答結果の見解や解釈を一致させることで、次のアクションを決めることとした。

日本版PHCは、JSCがパスウェイに関する事

表 2. 日本版パスイェイヘルスチェック Ver.2.4 の設問一覧

No.	設 問
1	オリンピック・パラリンピックや世界選手権等の国際競技大会でメダルを獲得するために求めるタレント像が科学的根拠に基づいて明確である。
2	シニア代表と年代別代表の厳密な選考基準を設定し、関係者（都道府県競技団体、クラブ、学校、大学、スポーツ団体等の利害関係者）に共有されている。
3	行動規範、紛争処理規定等のインテグリティに関するポリシーが明確に定まっており、使われている。
4	普及・発掘・育成・強化の各段階におけるアスリートの移行に滞（とどこお）りがない。
5	1大会先の国際競技大会（オリンピック・パラリンピック競技大会等）でメダルを獲得するため、今後2～6年の明確な短期計画がある。
6	2大会先の国際競技大会（オリンピック・パラリンピック競技大会等）でメダルを獲得するため、今後6～10年の明確な長期計画がある。
7	協働コンサルで策定した「強化戦略プラン」は、最新の根拠に基づいて多くの関係者（都道府県競技団体、クラブ、学校、大学、スポーツ団体等の利害関係者）の意見を吸い上げて策定している。
8	普及・発掘・育成・強化の各段階で必要なアスリートの育成方針が協働コンサルで策定した「強化戦略プラン」に基づいており、関係者（都道府県競技団体、クラブ、学校、大学、スポーツ団体等の利害関係者）の役割を明確にした上で共有されている。
9	法人としての理念や目的を踏まえた上で、事業・計画等の根本的な考え方としてビジョン（ありたい姿）とミッション（果たすべきこと）が首尾一貫している。
10	ビジョンとミッションを達成するための現実的な数値目標（KPI等）を設定した行動計画（アクションプラン）や年間計画がある。
11	協働コンサルで策定した「強化戦略プラン」の進捗状況を定期的に見直している（例：回/年）。
12	見直した「強化戦略プラン」を現場で迅速に実行に移している。
13	PDCA（計画・実行・評価・改善）サイクルに沿って事業を推進している。
14	普及・発掘・育成・強化プログラム（例：海外遠征合宿）を検証・評価する機会が十分ある。
15	競技者登録人数と公認指導者の数の正確な統計データがある。
16	普及・発掘・育成・強化の各段階の競技者登録人口の数は十分である。
17	男女の競技者がいる場合、競技者登録人口に男女の偏りがない。
18	男女の競技者がいる場合、男女の育成段階に偏りがない。
19	強化責任者及び強化スタッフ（理事も含め）一人ひとりの役割と責任が明確で、組織図に反映されている。
20	シニア国際競技大会での実績（例：メダル獲得等）や専門知識（例：マネジメント、スポーツ科学等）を持つ専任のハイパフォーマンスディレクターを配置している。
21	普及・発掘・育成・強化の段階を包括的にみる専任のパスイェイコーディネーター（※）やタレント発掘コーディネーター（※）等を配置している。 ※「パスイェイコーディネーター」とは、普及・発掘・育成・強化の各段階における環境整備（拠点、プログラム等）や段階間のアスリートの移行を円滑に進める役割を担うスタッフを指します。 ※「タレント発掘コーディネーター」とは、主に将来性豊かなアスリートの発掘と検証の役割を担うスタッフを指します。
22	スタッフを求人する際に、国際競技大会での実績（例：メダル獲得等）や専門知識（例：マネジメント、スポーツ科学等）を持つ人材を採用することができる。
23	スタッフの能力を開発するための専門的又は個別の能力開発の研修プログラムがある。
24	財政状況が健全である（財政的基盤が脆弱でない）。
25	普及・発掘・育成・強化の各段階における事業費（基盤的強化費、戦略的強化費、toto、自己財源等）の配分の割合、アスリート助成の実情を把握している。
26	ナショナルコーチ（※）、支援スタッフ、マネジメントチームとの会議を定期的に行っている（例：回/年）。 ※「ナショナルコーチ」とは、貴団体の立場（役職）として育成・強化の役割を担うフルタイムコーチを指します。
27	組織内（理事や意思決定者を含めたスタッフ間）で、綿密かつ効果的なコミュニケーションを行っている。
28	年代別代表（※）からシニア代表（※）まで一貫した指導方針があり、関係者（都道府県競技団体、クラブ、学校、大学、スポーツ団体等の利害関係者）に共有されている。 ※「年代別代表」とは、将来オリンピック・パラリンピック種目の代表につながる主にアンダーカテゴリー（例：ジュニア、ユース、カデ等）の代表を指します。 ※「シニア代表」とは、年齢制限のない（オープン）代表を指します。
29	目標に到達するための明確な発掘・育成・強化プログラムがある。
30	各段階においてコーチ人材育成プログラムを体系的に実施している。
31	ナショナルコーチ（※）を定期的に評価する仕組みがある。 ※「ナショナルコーチ」とは、貴団体の立場（役職）として育成・強化の役割を担うフルタイムコーチを指します。
32	将来有望なアスリートや選抜されなかったアスリートに対する支援体制を整備している。
33	国際競技連盟、中央競技団体、都道府県競技団体との連携・協働体制を構築し、各段階で密なコミュニケーションをとっている。
34	普及・発掘・育成・強化の各段階における関係者（都道府県競技団体、クラブ、学校、大学、スポーツ団体等の利害関係者）が誰であるかを把握し、各段階で連携して協働している。

コミュニケーションツール「日本版パスウェイヘルスチェック」の開発

No.	設 問
35	関係者（都道府県競技団体、クラブ、学校、大学、スポーツ団体等の利害関係者）に対して、国際ルールおよび規範の変更等を迅速に周知している。
36	普及・発掘・育成・強化の各段階を通してアスリートの支援・教育プログラムを系統的に実施している。
37	国内外の情勢を分析する情報戦略活動を積極的に実施している。
38	アスリートのプロフィール、チェックデータ、競技大会等の情報を集約するデータベースを構築・運用している。
39	都道府県別の参加者の正確な統計データがある（「ホットスポット分析」）。
40	参加者を増やすアイデアを草の根レベルから収集している。
41	参加者を増やす普及の取組を積極的に実施している（例：回/年）。
42	参加者を増やす普及の取組を見直す機会がある。
43	この段階（F段階）で基本スキル習得のための初心者向けのカリキュラムがあり、関係者（都道府県競技団体、クラブ、学校、大学、スポーツ団体等の利害関係者）に共有されている。
44	初心者が競技体験できる機会（例：ミニ大会）がある。
45	地域の指導者の数が十分である。
46	普及により増えた参加者を受け入れる施設が十分にある。
47	都道府県競技団体と連携・協働体制を構築し、綿密かつ効果的なコミュニケーションを行っている。
48	関係者（都道府県競技団体、クラブ、学校、大学、スポーツ団体等の利害関係者）に対して、普及に関する情報共有を定期的 に実施している。
49	この段階（T段階）の求めるタレント像（身体的、生理的、心理的、技術的、社会的特徴）が科学的根拠に基づいて明確である。
50	年代別代表（※）の厳密な選考基準を設定している。 ※「年代別代表」とは、将来オリンピック・パラリンピック種目の代表につながる主にアンダーカテゴリー（例：ジュニア、ユース、カデ等）の代表を指します。
51	選考基準は、生まれ月（相対的年齢効果）や晩熟型のアスリートに配慮している。（パラ競技の場合は、クラス分けにも配慮している。）
52	年代別代表（※）及びシニア代表（※）の出身地を把握している。 ※「年代別代表」とは、将来オリンピック・パラリンピック種目の代表につながる主にアンダーカテゴリー（例：ジュニア、ユース、カデ等）の代表を指します。 ※「シニア代表」とは、年齢制限のない（オープン）代表を指します。
53	年代別代表（※）からシニア代表（※）（現段階（T段階）から次の段階（E段階））への移行率（輩出効率）が高い（「コンバージョン分析」）。 ※「年代別代表」とは、将来オリンピック・パラリンピック種目の代表につながる主にアンダーカテゴリー（例：ジュニア、ユース、カデ等）の代表を指します。 ※「シニア代表」とは年齢制限のない（オープン）代表を指します。
54	他の競技から、又は他の競技への種目転向（種目最適化）に寛容である。
55	全国各地で同じ測定機器や測定方法等で専門的測定を実施している。
56	この段階（T段階）で目標に到達するために必要な育成方針を提示している。
57	年代別代表（※）からシニア代表（※）までの段階で明確な移行プログラムがある。 ※「年代別代表」とは、将来オリンピック・パラリンピック種目の代表につながる主にアンダーカテゴリー（例：ジュニア、ユース、カデ等）の代表を指します。 ※「シニア代表」とは年齢制限のない（オープン）代表を指します。
58	科学的な根拠に基づいた発掘プログラムを公式に実施している。
59	タレント発掘・育成の過程の中で検証期間を設定している。
60	この段階（T段階）に専任のコーチを配置し、ジュニア期からシニア期までの移行期の支援体制整備及び育成環境等の分析を行っている。
61	年代別代表（※）を対象に地域で合宿を実施している。 ※「年代別代表」とは、将来オリンピック・パラリンピック種目の代表につながる主にアンダーカテゴリー（例：ジュニア、ユース、カデ等）の代表を指します。
62	この段階（T段階）で国内外の競技大会を実施している（例：回/年）。
63	発掘・検証段階で選ばれた有望者を追跡している（「追跡調査・トラッキング」）。
64	年代別代表（※）は、スポーツ科学・医学・情報支援にアクセスし、利活用している。 ※「年代別代表」とは、将来オリンピック・パラリンピック種目の代表につながる主にアンダーカテゴリー（例：ジュニア、ユース、カデ等）の代表を指します。
65	この段階（E段階）の求めるタレント像（身体的、生理的、心理的、技術的、社会的特徴）が科学的根拠に基づいて明確である。
66	シニア代表（※）の厳密な選考基準を設定している。 ※「シニア代表」とは年齢制限のない（オープン）代表を指します。
67	協働コンサルで策定した「強化戦略プラン」に基づいてこの段階（E段階）に必要な育成方針を関係者（都道府県競技団体、クラブ、学校、大学、スポーツ団体等の利害関係者）に提示している。
68	シニア代表（※）の強化プログラムは、世界基準の根拠に基づいて計画通りに実施している。 ※「シニア代表」とは年齢制限のない（オープン）代表を指します。

No.	設 問
69	シニア代表における日常のトレーニング環境は世界基準である。 ※「シニア代表」とは年齢制限のない（オープン）代表を指します。
70	強化拠点があり、定期的に利活用している。
71	国際競技大会の開催に適した強化拠点がある。
72	シニア代表（※）における質の高い国内外の合宿を十分に実施している。 ※「シニア代表」とは年齢制限のない（オープン）代表を指します。
73	シニア代表（※）と年代別代表（※）が一同に介した合同合宿を実施している。 ※「年代別代表」とは、将来オリンピック・パラリンピック種目の代表につながる主にアンダーカテゴリー（例：ジュニア、ユース、カデ等）の代表を指します。 ※「シニア代表」とは年齢制限のない（オープン）代表を指します。
74	シニア代表（※）における質の高い国内外の競技大会派遣を十分に実施している。 ※「シニア代表」とは年齢制限のない（オープン）代表を指します。
75	この段階（E段階）で都道府県競技団体と連携・協働体制を構築し、綿密かつ効果的なコミュニケーションを行っている。
76	この段階（E段階）で関係者（都道府県競技団体、クラブ、学校、大学、スポーツ団体等の利害関係者）に対して、早期引退やタレントの喪失（タレントロス）を防ぐための情報共有を定期的の実施している。
77	シニア代表（※）は、スポーツ科学・医学・情報支援を利活用している。 ※「シニア代表」とは年齢制限のない（オープン）代表を指します。
78	シニア代表（※）に対するキャリア計画（例：デュアルキャリアのプラン）や能力開発等の高次の取組を実施している。 ※「シニア代表」とは年齢制限のない（オープン）代表を指します。
79	この段階（M段階）の求めるタレント像（身体的、生理的、心理的、技術的、社会的特徴）が個別性に基づいて明確である。
80	この段階（M段階）で個人の要望やニーズに合わせて個別性の高い強化プログラムを実施している。
81	この段階（M段階）で個別の課題に対しての高次の取組（高地トレーニングや能力開発等）を実施している。
82	この段階（M段階）の主な関係者（クラブ、企業、大学、スポーツ団体等の利害関係者）を把握し、連絡がとれる。
83	この段階（M段階）でアスリートのデュアルキャリアやメンタルヘルス/ウェルビーイング（より良く生きる様）の支援を積極的に実施している。
84	この段階（M段階）で企業や大学等と共同で研究開発（例：マテリアル、トレーニングツール）を実施している。
85	シニア代表（※）と年代別代表（※）の両方又はいずれかの国際競技大会でアスリートもしくはコーチとして実績（例：メダル獲得）のある年代別代表コーチ（※）がいる。 ※「年代別代表」とは、将来オリンピック・パラリンピック種目の代表につながる主にアンダーカテゴリー（例：ジュニア、ユース、カデ等）の代表を指します。 ※「シニア代表」とは年齢制限のない（オープン）代表を指します。 ※「年代別代表コーチ」とは、NFの立場（役職）として、「年代別代表」に対する育成・強化の役割を担うフルタイムコーチを指します。
86	年代別代表コーチ（※）に対して定期的に正当な評価を行い、適切な報酬を支払っている。 ※「年代別代表コーチ」とは、NFの立場（役職）として、「年代別代表」に対する育成・強化の役割を担うフルタイムコーチを指します。
87	年代別代表コーチ（※）は、スポーツ科学・医学・情報支援を積極的に利活用している。 ※「年代別代表コーチ」とは、NFの立場（役職）として、「年代別代表」に対する育成・強化の役割を担うフルタイムコーチを指します。
88	年代別代表コーチ（※）を教育する相談役・メンターに準ずる人材がいる。 ※「年代別代表コーチ」とは、NFの立場（役職）として、「年代別代表」に対する育成・強化の役割を担うフルタイムコーチを指します。
89	シニア国際競技大会でアスリートもしくはコーチとして実績のある（例：メダル獲得）専任のシニア代表コーチ（※）を配置している。 ※「シニア代表コーチ」とは、NFの立場（役職）として、「シニア代表」に対する育成・強化の役割を担うフルタイムコーチを指します。
90	シニア代表コーチ（※）に対して定期的に正当な評価を行い、適切な報酬を支払っている。 ※「シニア代表コーチ」とは、NFの立場（役職）として、「シニア代表」に対する育成・強化の役割を担うフルタイムコーチを指します。
91	シニア代表コーチ（※）は、スポーツ科学・医学・情報支援を積極的に利活用している。 ※「シニア代表コーチ」とは、NFの立場（役職）として、「シニア代表」に対する育成・強化の役割を担うフルタイムコーチを指します。
92	シニア代表コーチ（※）を支援するアドバイザーや相談役・メンターに準ずる人材がいる。 ※「シニア代表コーチ」とは、NFの立場（役職）として、「シニア代表」に対する育成・強化の役割を担うフルタイムコーチを指します。
93	シニア代表コーチ（※）を求人する際に、シニア国際競技大会でアスリートもしくはコーチとして実績のある（例：メダル獲得）人材を採用することができる。 ※「シニア代表コーチ」とは、NFの立場（役職）として、「シニア代表」に対する育成・強化の役割を担うフルタイムコーチを指します。

公益社団法人 ●●連盟 様
 回答日：20●●年●月●日
 方法：オンライン回答

パスウェイヘルスチェック v2.4 フィードバックシート

このフィードバックシートは、パスウェイヘルスチェックの回答結果をもとに、普及・発掘・育成・強化に関連する課題が明確になることをねらいとして作成されました。課題に対する具体的な解決策について検討する際にご活用いただければ幸いです。

フィードバックシートについて

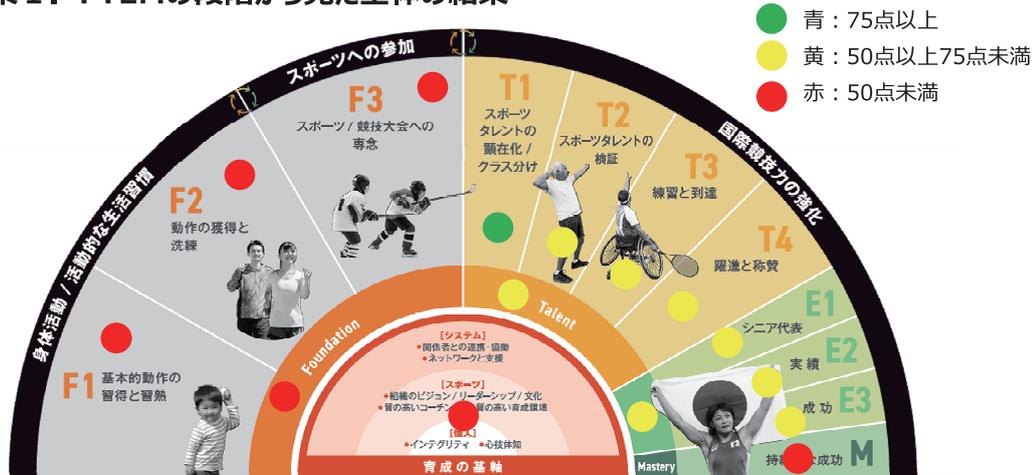
回答結果を集約し、全回答者の平均値に重要度を反映した重みづけを行い、100点満点に換算した上で、赤黄青の信号表示により一覧できるダッシュボードで視覚化したものです（結果1、結果2）。また、2枚目では、回答が「いいえ」であった（得点が低かった）項目について示しています（結果3）。

データの見方

以下に示す「結果1」と「結果2」では、まず赤（50点未満）の部分を探してみましょう。その後、相対的に得点が高い部分と低い部分を確認して、育成の基軸のどの部分か、という観点で確認して、その要因について貴団体内で話し合ってみましょう。

2枚目の資料内の「結果3」では、回答者の過半数以上の回答が「いいえ」であった項目、「結果4」では回答にばらつきのある項目を示していますので、その要因について貴団体内で話し合ってみましょう。上記の要因を踏まえて、貴団体として改善すべきだと考えられる次のアクションを考えてみましょう。

結果1. FTEMの段階から見た全体の結果



結果2. 育成の基軸から見た個別の結果

段階	インテグリティ	心技体知	組織のビジョン/リーダーシップ/文化	質の高いコーチング	質の高い育成環境	関係者との連携・協働	ネットワークと支援
FTEM全体	● 58	● 79	● 42	● 26	● 38	● 61	● 24
F	-	● 50	● 39	● 50	● 29	● 42	● 50
T	-	● 79	● 81	● 54	● 73	● 67	● 58
E	-	● 67	-	● 49	● 69	● 46	● 52
M	-	● 17	-	● 21	● 21	● 17	● 15

※「-」：日本版PHCの設問として設定されていないため得点が表示されない

図1. 事業で活用されたフィードバックシート（イメージ）

業を実践する中で、NFにおけるパスウェイの現状把握や課題抽出のために、NFのパスウェイ構築に関わる関係者間でのコミュニケーションを促進するためのツールとして開発された。本研究では、諸外国の事例を参考に、パスウェイ有識者とパスウェイ専門家が協働して日本版PHCの基本設計を行い、JSC事業に関わるNFの意見を組み込むことで、より実践場面で役立つツールの開発を目指した。以下は、開発した日本版PHCをJSC事業で活用した事例を報告して、得られた波及効果と課題、及び課題を踏まえた実践的提言を述べる。

Ⅲ. 日本版PHCの活用事例

1. 「アスリートパスウェイの戦略的支援」事業での活用事例

本節の対象NFは、2020～2021年度「アスリートパスウェイの戦略的支援（競技別コンソーシアムによる地域パスウェイの整備）」事業を委託された7団体であった。対象NFは、2021年1～2月又は2021年5～6月に日本版PHCの趣旨や実施方法をパスウェイ専門家から説明を受けた後、当事業の各NF担当者を中心に普及・発掘・育成・強化に関連する回答者を選定して、日本版PHC（全93問）にオンラインシステム（Microsoft Forms、Microsoft社製）より回答がなされた。

本節の対象NFの日本版PHC回答者に対してパスウェイ専門家によるフィードバックの機会（課題検討会議）が設けられ、回答結果は、パスウェイの現状把握や課題抽出のために用いられた。フィードバック内容は、まず日本版PHCの回答から日本版FTEM³⁾の育成段階や育成の基軸別に得点化され、信号の評価システムの結果を観察しながら、パスウェイの現状や課題の全体像が課題検討会議に参加したNFの日本版PHC回答者間で共有された。その後、NFの日本版PHC回答者間で回答に差があった設問や相対的に得点の低かった設問に対して議論する機会が設けられた。そして、パスウェイに関する課題の詳細化や具体化を進めるとともに、課題の優先順位と現実

的にJSC事業内で改善でき得る内容が見定められた上で、次のアクション（パスウェイの課題に対する改善策、関係者との連携促進等）の検討が行われた。

日本版PHC活用後の対象NFに対するアンケート調査では、「情報共有の機会を創出できて良かった」「NF内での議論により個人間で考え方や理想とする姿が異なることに気がついた」「アスリートの育成過程に様々な課題があった」「NF内での情報共有のみで終わらないために次のアクションにつなげる必要があると感じた」「客観的な指標を用いることが今後必要であると感じた」の波及効果と課題に関する回答が得られた（表3）。

2. 「次世代ターゲットスポーツの育成支援」事業での活用事例

本節の対象NFは、2021年度「次世代ターゲットスポーツの育成支援」事業を委託されていた16団体であった。対象NFは、日本版PHCの趣旨や実施方法をパスウェイ専門家から説明を受けた後、当事業のNF担当者を中心に回答者が選定され、2021年4～5月（事業実施前：PRE）と2021年11～12月（事業実施後：POST）の計2回、日本版PHCのT（タレント）及びE（エリート）段階に該当する設問にオンラインシステム（Microsoft Forms、Microsoft社製）より回答がなされた。当事業では、T及びE段階のパスウェイの構築支援を実施していたことから、日本版PHCの全93問のうち、該当する39問の設問が選択され活用された。

PREの回答結果とフィードバック内容は、回答者に対してパスウェイ専門家によるフィードバックの機会（課題検討会議）が設けられ、パスウェイの現状把握や課題抽出のために用いられた。このフィードバックは、T及びE段階の設問を上述のⅢ. 1. 「アスリートパスウェイの戦略的支援」事業と同様の方法で実施された。POSTの回答結果は、日本版PHCの設問別にPREからの回答の変化（増減）が定量化されたフィードバックシートを作成して、NFにフィードバックされ

表3. 日本版パスウェイヘルスチェックを活用した対象NFに対するアンケート調査結果の一覧

事業名	波及効果	課題
アスリートパスウェイの戦略的支援 (競技別コンソーシアムによる地域パスウェイの整備)	<ul style="list-style-type: none"> ・情報共有の機会を創出できた点が良かった。 ・NF内の議論により個人間で考え方や理想が異なることに気がついた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アスリートの育成過程に様々な課題があった。 ・NF内での情報共有のみで終わらないように次のアクションにつなげる必要があると感じた。 ・客観的な指標を用いることが必要であると感じた。
次世代ターゲットスポーツの育成支援	<ul style="list-style-type: none"> ・これまででない観点からパスウェイを考えることができた。 ・これから取り組むべき課題とPHCの回答結果が一致していた。 ・設問を1つずつ確認すること自体が現状把握に繋がった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体系的な取組が必要だと感じた。 ・用語や意味が分かりにくい設問もあった。 ・競技特性に合わない設問があるように感じた。 ・回答者の立場により回答が変わってくると感じた。

た。そして、回答に変化(増減)があった設問について、その変化の要因を踏まえた改善案が本節の対象NF内で議論された後、当事業における次年度(2022年度)の計画に反映された。

日本版PHC活用後の対象NFに対するアンケート調査では、「これまででない観点からパスウェイを考えることができた」「これから取り組むべき課題とPHCの結果が一致していた」「設問を1つずつ確認したこと自体が現状把握に繋がった」「体系的な取組が必要だと感じた」「用語や意味が分かりにくい設問もあった」「競技特性に合わない設問があるように感じた」「回答者の立場により回答が変わってくると感じた」の波及効果と課題に関する回答が得られた(表3)。

IV. 実践的提言

本研究では、日本版PHCの開発過程を報告した。その結果、日本版PHCをコミュニケーションツールとして活用することで、本研究の対象NFがパスウェイの現状把握や課題抽出について情報共有や議論する機会を提供し、課題解決のための次のアクションを設定することが可能となった。また、先述の「Ⅲ. 日本版PHCの活用事例」で得られた対象NFへのアンケート調査の結果を、波及効果と課題に分けて整理した(表3)。以下は、これらの知見を踏まえて日本版PHCを

実施する上での注意点について述べる。

表3の日本版PHC活用の波及効果をみると、日本版PHCの開発趣旨であったNFにおける普及・発掘・育成・強化の担当者が一同に介する場として課題検討会議を行ったことにより、コミュニケーションの促進がうかがえ、開発趣旨に対する一定の成果が得られたと思われる。日本版PHCを用いてNF関係者間での効果的なコミュニケーションを図る際には、「個人の考え方や理想が異なること」「これまででない観点からパスウェイを考えること」「設問を1つずつ確認することが現状把握に繋がること」を念頭に置き、回答結果を肯定的に捉えて、建設的な議論を行うことが望ましいと思われる。

一方で日本版PHC活用の課題についてみると、抽出された本研究の対象NF内の課題と、日本版PHCのツールとしての課題の大きく2つの観点から、実施上の注意点を検討する必要があると考えられた。まずNF内の課題として、「パスウェイの課題の可視化」「次のアクションの具体化及び実行化」「体系的な取組や客観的な指標の必要性」が明らかとなった。これらの課題を踏まえて、各NFは日本版PHCを活用したコミュニケーションの促進により可視化された現状や課題について、パスウェイを体系的に捉えた上で各自の役割を明確にして、次のアクションを客観的な指標

等を設定して実践していくことが重要であると考えられる。

また日本版 PHC のツールとしての課題として、「一部の設問の用語・内容が難しいこと」「競技特性に完全に合致しないこと」「回答者の立場により回答が異なること」が明らかとなった。これらの課題を踏まえて、日本版 PHC を用いる際には次のようなことに注意すべきと思われる。まず、回答者の選定時には、NF の普及から強化までの範囲を網羅できる回答者の編成を考えることが推奨される。回答者の選定後は、回答者間における日本版 PHC の設問内容の解釈を合わせた上で、各自回答することが望ましいと思われる。また、回答者の立場によって回答が異なったという課題に対しては、第三者のファシリテーターを配置し、一同に介した回答者がコミュニケーションを図りながら建設的に議論することが望ましいと思われる。さらに、対象 NF 内の体制変更等によりスタッフが入れ替わる際には、前任者と後任者とが議論しながら日本版 PHC に回答して、設問の理解度を同水準にした上で対象 NF の現状を把握していくような工夫も必要と考えられる。しかし、現実的には、本研究で開発したツールを用いて前体制におけるパスウェイの現状と課題が NF 内に記録として残ることで、新体制においてその改善点を更に検討するための参考資料として活用できる可能性もあると思われる。

本研究の限界は、日本版 PHC の開発過程から活用までに、全てのオリンピック・パラリンピック競技に対して活用したわけでないため、競技特性や各競技のパスウェイ（普及・発掘・育成・強化）の一連の体制整備の状況の違い等を踏まえると、汎用性の検証がやや不十分な点である。この点について、日本版 PHC の設問（全 93 問）は、パスウェイに関連する現状把握や課題抽出のための競技共通の大きな枠組みの一つとして捉えるといえると思われる。各競技に該当しない設問がある場合は、事前に各 NF 内で該当する設問の重要性や必要性等について議論して、設問に対する見解や解釈を一致させた後で設問に回答するか、もしくは

回答結果（得点）の高低について議論する方が好ましいと思われる。今後は、日本版 PHC の設問に対して「当てはまらない」「該当なし」等の回答も検討されるべきであろう。

最後に、「第 3 期スポーツ基本計画」⁵⁾や「持続可能な国際競技力向上プラン」⁷⁾では、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会での好成績を一過性のものとせず、持続的に国際競技力向上の維持及び向上を図っていくために、「各競技のアスリート育成パスウェイを可視化するため、JSC の各 NF におけるアスリート育成の現状を分析するツール（パスウェイヘルスチェック）を活用しながら、NF が日本版 FTEM 等に基づく競技別育成パスウェイモデルを策定するための支援を行う」「NF におけるアスリート育成パスウェイの構築等を通じた、中長期の戦略的な発掘・育成・強化の取組により、世界で活躍するトップアスリートを継続的に輩出する」と謳われている。つまり、NF はパスウェイの現状を分析した上で、中長期の戦略的なパスウェイの構築に取り組むことが、我が国のスポーツ政策の目標の一つとして掲げられているといえる。本研究で開発した日本版 PHC は、NF における中長期の強化戦略を考える前段階に必要なパスウェイの現状把握や課題抽出に寄与するものであり、パスウェイ構築に関わる関係者と連携・協働するための共通理解を促すためのコミュニケーションツールとして活用されることが今後期待される。

V. まとめ

本研究では、対象 NF におけるパスウェイの現状把握や課題抽出のためのコミュニケーションツールである日本版 PHC の開発過程を報告した。日本版 PHC は、諸外国の事例を参考に、我が国のパスウェイの概念を踏まえて設問や運用ツールが、7 年間に渡る JSC のパスウェイに関連する事業の中で実践的に活用しながら開発されてきた。このツールを活用する上では、日本版 PHC の回答結果を踏まえて NF のパスウェイ構築の関係者間で主体的に次のアクションを協議し、NF 内で

の合意形成のために見解や解釈を一致させていく過程が重要であり、今後、NFのパスウェイ構築に関わる関係者が連携・協働しながら中長期的な視点に立って最適なパスウェイを構築していくことが期待される。

註1：文部科学省「第3期スポーツ基本計画」⁵⁾は、スポーツ基本法の規定に基づき、文部科学大臣が定めるスポーツに関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るための重要な指針である。

註2：スポーツ庁「持続可能な国際競技力向上プラン」⁷⁾は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会での好成績を一過性のものとせず、かつ少子化が進むわが国において持続的に国際競技力の維持・向上を図っていくことを基本とした計画である。

註3：日本版FTEM³⁾は、Gulbin et al.¹⁾により提唱されたFTEM (Foundation, Talent, Elite, Mastery)の枠組みをもとに、我が国における根拠に基づいたアスリート育成パスウェイの構築を推進するため、JSCが開発したスポーツとアスリート育成の包括的な枠組みである。

付記

本研究は、2016年度「メダルポテンシャルアスリート育成システム構築事業」、2017～2021年度「アスリートパスウェイの戦略的支援」、2021年度「次世代ターゲットスポーツの育成支援」の事業費を受けて実施したものである。

文献

- 1) Gulbin JP, Croser MJ, Morley EJ, Weissensteiner JR. An integrated framework for the optimisation of sport and athlete development. *J Sports Sci*,

31(12): 1319-1331, 2013.

- 2) 衣笠泰介, 藤原昌, 和久貴洋, Gulbin J. 我が国におけるタレント発掘・育成に関する取組の変遷. *Sport Science in Elite Athlete Support*, 3: 15-26, 2018.
- 3) 衣笠泰介, 船先康平, 藤原昌, Morley E, Gulbin J. 我が国のスポーツとアスリート育成における国際的な包括的枠組みの適用: 「日本版FTEM」の開発. *Journal of High Performance Sport*, 4: 127-140, 2019.
- 4) 衣笠泰介, Morley E, 船先康平, 藤原昌, Gulbin J. アスリート育成パスウェイにおける国際モデルのシステムティックレビュー. *Journal of High Performance Sport*, 4: 105-119, 2019.
- 5) 文部科学省. 第3期スポーツ基本計画 (令和4年3月).
https://www.mext.go.jp/sports/content/00002129_9_20220316_3.pdf (2022年5月31日)
- 6) Pankhurst A, Collins D, Macnamara Á. Talent development: linking the stakeholders to the process. *J Sports Sci*, 31(4): 370-380, 2013.
- 7) スポーツ庁. 持続可能な国際競技力向上プラン (令和3年12月).
https://www.mext.go.jp/sports/content/20211227_spt_kyosport_300000861_2.pdf (2022年5月31日)
- 8) UK Sport. Pathway Analytics.
<https://www.ukssport.gov.uk/our-work/talent-id/pathway-analytics> (2022年5月31日)
- 9) Weissensteiner JR. Method in the madness: Working towards a viable 'paradigm' for better understanding and supporting the athlete pathway. In Weissensteiner JR (Ed.), *Routledge handbook of talent identification and development in sport*. Routledge, pp.133-149, 2017.